



興奮しない!?
じゃあ試してあげるっ

素直じゃない成美



※実際にはモザイク修正です。

圭太「一人暮らしを始めて気軽な生活を手に入れたと

思ってたんだがな・・・」

成美「何ぶつくさ文句言ってるのよ？」

圭太「一人暮らし・・・の筈・・・なんだが・・・」

そう不満そうに声の主に視線を向ける。

成美「何？私が邪魔だとしても言いたいのか？毎日遊びに

来て上げてるのに??」

圭太「それが・・・いや何でもない」

成美「感謝してよね、暇で童貞で甲斐性なしの圭太の

相手をしてあげてるんだから!」

圭太「いや・・・頼んでないけど」

成美「ん!？」

成美は威圧する様に圭太を睨む。

圭太「こ・・・ごめん・・・」



どうも成美の強引な態度に弱く、まともに言い返せた事がない圭太はいつもこの調子だ。

成美「圭太と違ってモテモテの私が遊んびに来てあげてるんだからもっと喜ばなさい」

圭太「なあ・・・成美って昔からそんな感じだったっけ？」

成美「えっ！？・・・その・・・そ、そうよ・・・
何言い出すかなあ・・・」

圭太「(何だ？動揺してる鳴海は初めて見たな・・・)」

成美「そんな事より何かしよーよ」

圭太「ん？俺はゲームしてるから適当にしてろよ
(態々相手にする事もないしな・・・)」

成美「ちよっと！私は放置かい！」

圭太「いつもの事だろ」

こう毎日来られてはやる事も無くなると言うもの。







あ、これって昨日
発売されたやつ？

ああ……

くっ・成美め
前よりまた成長
したな・胸が





私もやってみた...
ちよつと...

...んっ?

成美「今・・・どこ見てた・・・？」

圭太「へっ・・・べ、別に・・・どこも??」

(まずい気づかれたか?)

成美「・・・胸・・・見てたよね?・・・ねっ?」

圭太「み・・・見るかよ・・・お前の胸なんて!」

成美「むっ・・・ふうん・・・そう・・・私の体に

まったく興味ないんだ・・・」

圭太「あ・・・当たり前だろ・・・何言ってるんだか・・・」

成美「・・・じゃあ・・・試してあげる・・・」

圭太「はあ・・・何を試すって?」

成美はそう言うと徐に立ち上がった。









おまっ・・・何やって
・・・馬鹿・・・
興奮する訳・・・

どう・・・興奮した？
童貞の圭太には刺激が
強すぎ？



こ...これは...
違うっ...別にその...

そう言いながらアソコは
違うみたいだけど...?

成美「へっへっへ・・・なんだ私の体見てアソコ

堅くなっちゃったんだ♪」

圭太「だからこれは・・・違うつて!」

成美「何が違うのかな?」

圭太「くっ・・・だから・・・」

成美「素直に可愛くて・・・だ、大好きな私に興奮したって
認めなさいよ!」

圭太「何かいろいろくっ付いてるぞ!？」

成美「あゝもうこうなったら・・・」

圭太「あつコラッ何を」

成美は圭太に飛び掛り服を脱がしてアソコを確認し始めた。

成美「うわっ・・・これが・・・圭太の・・・」

圭太「やめっ・・・しかも何で驚いてんだよ!」

成美「べ、別に驚いてなんか・・・こうしてやる!」









ふあっふあっほお
ふいほおめほお

フッ
フッ
フッ

ふあっ・・・おまっ
なんで・・・くっ・・・





成美「うう・・・」

圭太「お前何やってんだよっ！」

成美「認める気になった!？」

圭太「はあ?・・・何を？」

あまりにも成美の突飛な行動で何でこんな事になってるのか忘れて居た。



成美「だ〜か〜ら〜可愛くて大好きで、け、結婚したい位の私に興奮したって認めなさいよ」

圭太「えっそんな話だったっけ??」

成美「・・・圭太がそこまで強情だとは知らなかった・・・

なら・・・良いよ・・・意地でも認めさせてあげる」

そう言つと成美は服を脱ぎ始めた。







うぐっ...うぐっ...あれな...
...うぐっ...うぐっ...?

おま...そんなに
苦しそうにして

うぐっ
うぐっ
うぐっ



何よ... 寝るさ

もしかして成美
お前しよじ... よ

ふふふふ

違うもん・・・モテモテだし
やりまくりだもん・・・

・・・でもお前

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ



成美の言ってる事と苦しそうに歪む表情に疑問を持ちつつ
想像してしまう、成美が他の男としている姿を……
途端、胃の辺りが締め付けられる様に感じた。

くそっ……!!







えっちょっ...圭太？
ひっ...あっただめっ

別に良いだろ！
他の奴にも
させてるんだから

ブッブッ

よく分からない怒りが込上げて来た圭太はソレを成美に
ぶつけた。









このおっぱいも・・・
揉まれて大きくな
ったのか！

ヌプッ
ググッ

ふぁっあっだめっ
はげしっ・・・あぁっ

あ



何が違うんだ!
くそつくそつ!
こんなつ...

ちがつ...ちがつの
...けい...たあ

あ

アプッ
グッ



はあはあくっ...
気持ち良い...

アプッ
グッ

あつやああつ...
だめっだってえ

あ





はあはあ成美...
俺もう...

えっだっためっ
中は...

アッ
グッ



成美「なんで・・・だめって・・・言ったのにい」

圭太「ご・・・ごめっ・・・成美が他の男とって・・・
考えたら急にムカついて・・・」

成美「・・・それって・・・」

圭太「ああ、認めるよ・・・俺は成美が好きみたいだ」

成美「・・・早く・・・言ってよ・・・初めてだったのに」

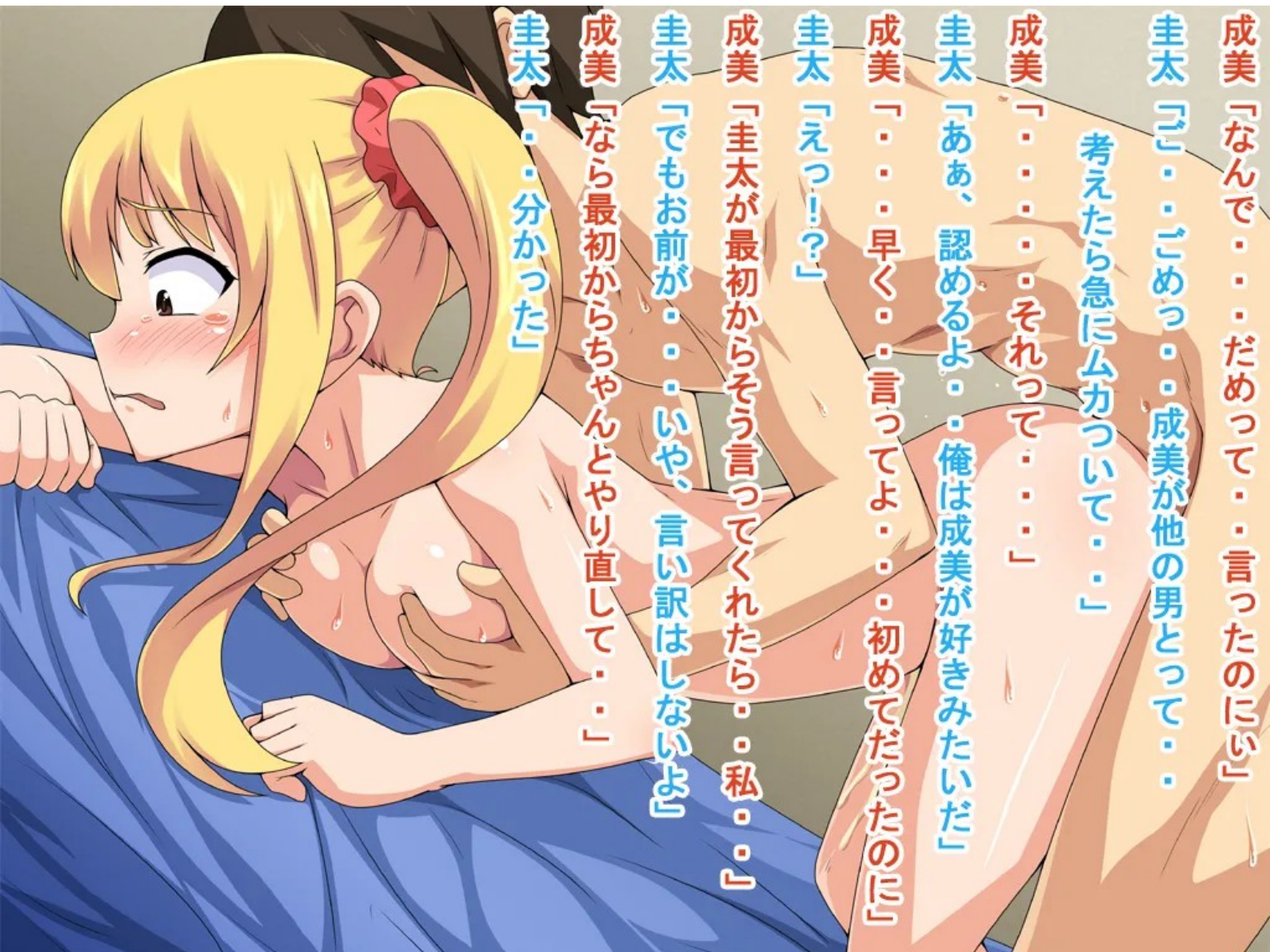
圭太「えっ!？」

成美「圭太が最初からそう言ってくれたら・・・私・・・」

圭太「でもお前が・・・いや、言い訳はしないよ」

成美「なら最初からちゃんとやり直して・・・」

圭太「・・・分かった」





えっ・・・？



なら・・・んっ・・・

あ、
あぁっ

キスだってちゃんと
してないんだから
ちゃんとして



二人はお互いの気持ちを確かめるように唇を重ねた。









ああ、すごく綺麗だ
今度はちゃんと優しく
するからな・・・

うう・・・なんだか
急に恥ずかしく
なってきたやつた



ああ

はあはあ・・・成美の中
気持ち良いよっ・・・
すごく・・・

ふあっ・・・圭太の
入って・・・来た・・・

ズ
ブ
ッ
ッ



ああ

さっきは無我夢中で
分からなかったけど
これは・動くぞっ

ズ
ブ
ッ

圭太のが中で
ビクビクッって





良いよっ成美・
すごく気持ち良いっ

おお

圭太が気持ち良い
なら・嬉っ・
あっっんっ

アッ
アッ
アッ

んっ



ごめん・・・もっと
早く気づくべき
だった・・・

おお

毎日・・・来てのために
全然・・・圭太は・・・
んんっ

アッ
アッ
アッ

んっ



えへっ・・・
あぁっ・・・楽しみに
・・・んっしてる・・・

これからその分も
取り返せる様・・・
がんばるよっ

んっ

んっ

アッアッ





圭太「そういえば成美が言ってた・・・可愛いとか・・・」

アレって・・・」

成美「うつ・・・それはくその・・・」

圭太「そう言っただけじゃなかったって事？」

成美「だからあれば勢いで・・・」

圭太「違うのか？」

成美「・・・・・・」

圭太「成美・・・可愛いよ・・・」

成美「~~~~~」

成美は今まで見たこと無い位顔を赤らめてそっぽを向いてしまった。

圭太「成美は本当に可愛いなあ」

成美「許してえ・・・」

二人の仲は変わったようでも変わってないようにも思えたがそれはそれで幸せだと思う圭太だった。

おわり





























